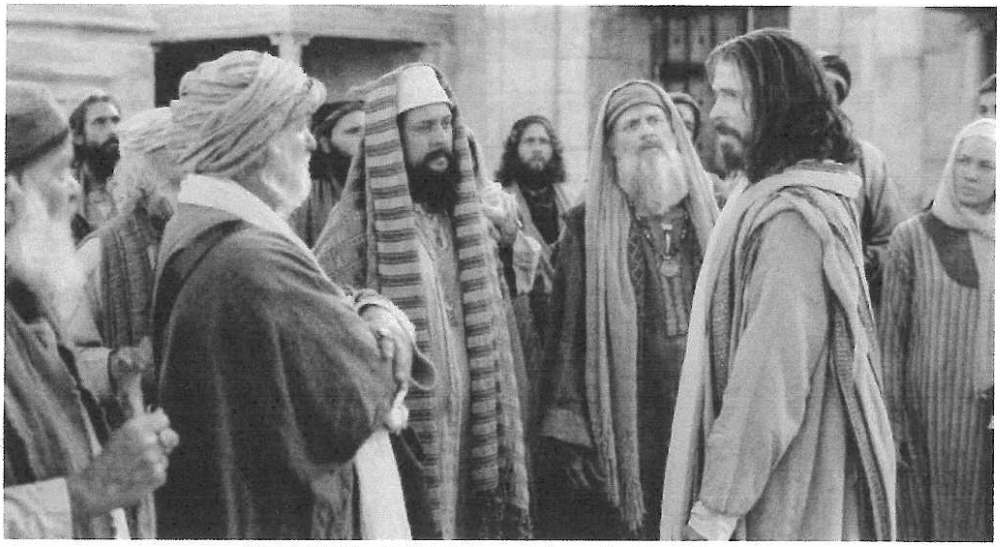
２０２４・６・９　　黄金井尚美　主任牧師

<本当の汚れとは>

マルコ７：１４～２３



律法学者・パリサイ人　対　イエス・キリスト

◆神の民としての聖さを保つ（分離）ためには・・・・モーセの律法を守り行うこと。しかし目的から外れて、守り行うこと自体が重要視されていた。

◆本来のあるべき姿に、神の恵みに立ち返るように、闘うイエス様。律法学者パリサイ人と強烈な摩擦が生じた。

◆「神のため」と言いながら、実は自分の思いを満足させるためにしている。そんな弱点を人は持っていることを、心に留めておく必要がある。

弟子達が洗わない手（不浄）で、パンを食べた問題が勃発！（マルコ７：１～１３）
周りには、様子を伺う群衆がいた。
自分達も律法を守り行うことを第一として生きてきた一人。どう受け取ったのか。

◆クリスチャンになって、神と共に生きる新しい歩みが始まった。しかし、足場は昔から馴染んできたしきたりの中にある。聖書のことばによって、自分が重視してきたことが覆され、思考が揺さぶられるようなことはないだろうか。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。 詩篇 119：130

イエスは再び群集を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すものなのです。」　【１４節】

外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。

これにビックリ！

なぜなら、厳格な食物規定を命がけで守ってきた歴史があった。

食物規定は、聖いか、汚れるか、外側から人に入る物について語っている。

（レビ記１１章参照）

食物規定が与えられた目的

・民の生活が守られるための神の知恵･･･調理技術や衛生観念が未熟

・神が「聖」であることを教える･･･聖なる神こそが「聖さ」の基準を示される方。

・ユダヤ人が異邦人と同化しないように、

「聖さと汚れ」は、人間の知恵によるものではなく、神の一方的な基準。

これは

<u>イエス・キリストの十字架によって、聖くされた</u>というメッセージにも重なる。

「汚れた動物」を食べるように、幻の中で言われたペテロ　(使徒 10 章)

→　イタリア隊の百人隊長コルネリオの救いが示された。

ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。　使徒１０：２８

人から出て来るものが、人を汚すものなのです。そして、内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。【21～23 節】

人は、自分で自分の心をきよくできるだろうか？

パリサイ人は外側の汚れから身を守ることで、内側をきよくできると考えた。

しかし、実際はその逆だった。

汚れから身を避けることに熱心になるよりも、自分の心に響いてきた

みことばを思いめぐらし、心が神の愛で満たされる方向を目指す。